

オンラインによる幼保小連携接続研修会における保育者・小学校教員の学び
 —「新潟大学附属長岡小学校スタートカリキュラム公開研修会兼附属
 幼稚園幼児教育研修会 R3 年度第 1 回保育のとびら」への参加者を
 対象としたアンケート調査の分析から—

ECEC and Elementary School Teacher's Learning in an Online Workshop on Connection
 between ECEC Settings and Elementary School: Analysis of the Questionnaire Survey for the
 Participants of the Workshop Held by Nagaoka Elementary School and Kindergarten Attached
 to Niigata University

中島 伸子^{*1}・倉石 智幸^{*2}・水瀬 正大^{*3}・笠原 知明^{*2}

Nobuko Nakashima^{*1}, Tomoyuki Kuraishi^{*2}, Masahiro Mizuse^{*3}, Tomoaki Kasahara^{*2}

要約

本研究では、新潟大学附属長岡校園主催のオンラインによる幼保小連携接続研修会に着目し、研修会としての特徴を明確化した上で、参加者である小学校教員、保育者の学びの内容を明らかにすることを目的とした。本研修は（１）保育と小学校授業、両者についての研修内容から構成されること、（２）研修動画視聴やグループトーク（協議会）を中心に構成されること、（３）多様な校園種や教育施設（保幼こ小中、行政関係者）所属の参加者同士のかかわりがあったこと、の３点が主要な特徴であった。小学校入学直後および幼児期の子どもの学びや育ちの様子や、指導の在り方等について質問し、回答を分析したところ、「子どもの育ちの連続性やそれを踏まえた指導・取り組み」「子ども中心の指導や遊び・環境を通じた教育」「相互理解・他校園種理解」「話し合い・情報交換・情報共有」についての学びが比較的多い傾向が示唆された。さらに、文部科学省初等中等教育局教育課程課・幼児教育課（2019）が掲げた「接続をすすめるために必要なこと」３点（①教育の特性を互いに理解すること、②連携、接続体制を作ること、③教職員が意識的に幼小接続に取り組むこと）の促進につながりうる学びの生起が示唆された。本研究のどのような特徴が参加者の学びに関連するかの検討は今後の課題であるが、コロナ禍の工夫の一つとしてなされたオンライン研修会において、連携接続推進のための意識を醸成しうることを示した点は意義深い。

キーワード 連携 接続 合同研修 スタートカリキュラム 幼児教育 オンライン

研究の背景と目的

1. 幼保小連携、接続に関する近年の政策の動向

2017年に小学校学習指導要領（文部科学省、2017a）および幼稚園教育要領（文部科学省、2017b）、保育所保育指針（厚生労働省、2017）、幼保認定こども園教育・保育要領（内閣府・文部科学省・厚生労働省、2017）が同時改訂され、いずれの要領、指針においても幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の重要性が明記さ

2022.6.27 受理

^{*1} 教育実践学研究科、^{*2} 附属長岡小学校、^{*3} 附属幼稚園

れた。このことから、これまで以上に円滑な接続の実現が求められる現在だととらえることができる。

しかしながら、現状では地域、自治体によって進捗状況に大きな差があり、接続や連携が十分に達成されているとは言い難い。例えば、文部科学省（2020）によれば、全国の半数以上の市町村が「年数回の交流はあるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない」とされる。

こうした課題の解決を目指し、5歳から小学校1年生の2年間を架け橋期として設定した幼保小架け橋プログラムが進められており、2022年春に実施にむけての手引きが示された（文部科学省，2022）。

2. 幼保小連携、接続に関する研修の重要性

幼児期の教育と小学校教育の接続の推進に必要なこととして、文部科学省初等中等教育局教育課程課・幼児教育課（2019）は、教育の特性を互いに理解すること、連携、接続体制を作ること、教職員が意識的に幼小接続に取り組むことの3点を挙げている。そして、これらを押し進める手だての一つとして、「各学校・施設研修や行政主催研修」といった研修の充実の検討を求めている。

学校園種等をこえての意見交換や合同研究・研修の機会の確保の重要性も指摘されている。例えば、幼児期の3要領・指針においては、小学校教育との円滑な接続をはかるために、小学校教師との意見交換や合同の研究の機会を設けることの必要性が記載されている。こうした考え方は、架け橋プログラムにも反映されており、架け橋プログラムを具体的に進めるに当たっての自治体の支援の一要素として、幼保小合同研修会の実施と工夫が提案されている（文部科学省，2022）。

3. 本研究における問題と目的

以上のように、幼保小連携、接続を推進する一つの方策として研修が重要であることが指摘され、とりわけ、学校園種を越えた合同研修会の必要性が認識されている。こうした研修会は、全国の様々な地域において、様々な主催者により多様な形態でなされている（例えば、一前・秋田・天野，2021）。しかしながら、研修会で参加者が何を学ぶかについて、何らかのデータに基づいて検討した研究は数えるほどしかない（伊藤・沼田・宗像・柴田，2020；片岡，2015；木村，2021；小松，2020；清水，2014）^{注1}。

さらに、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、対面研修の開催が困難となり、オンラインを活用した研修会の開催が増加した現在、それが参加者にとって有効な学びの手段となりうるかを検討することも喫緊の課題である。

以上を踏まえ、本研究では、幼児期の教育と小学校の教育の連携、接続に関する特定のオンライン研修会に着目し、参加者である小学校教員、保育者の学びや気づきをアンケートへの回答傾向に基づいて検討することを目的とする。具体的には、新潟大学附属長岡校園が中心となって実施されたオンラインによる幼保小連携接続研修会を取り上げ、研修会としての特徴を明確化した上で、参加者の学びの内容を明らかにし、上記、文部科学省初等中等教育局教育課程課・幼児教育課（2019）が掲げた「接続をすすめるために必要なこと」3点の促進につながりうるかを考察する。なお本論では、秋田（2010）の整理を踏襲し、連携を「保育・教育制度間での人とのかかわり」を、接続を「教育内容や教育制度システムの設計や変更というシステムの在り方」を指すものとする。

検討対象とした研修プログラム

1. 概要

本研修プログラムは、附属幼稚園幼児教育研修会「保育のとびら」と附属長岡小学校「スタートカリキュラム公開研修会」とのタイアップとしてなされたものである。こうしたタイアップは初めてであった。附属長岡小学校・幼稚園の全職員体制で準備・運営したZoomを使用したオンライン研修会であった。長岡市教育委員会共催、新潟県教育委員会および三条市教育委員会後援であり、案内は県内の全幼稚園・保育園・幼保連携型認定こども園、県内の全小学校、幼稚園教員養成・保育士養成の専門学校、新潟大学教育学部・教職大学院、県内教育関連諸機関（新潟県教育委員会・県立教育センター・中越教育事務所等）に配布され、任意参加であった。無料で開催された。89名の参加があり、その内訳は、保育者（幼稚園、子ども園、保育所勤務の者のほか、子育て支援施設勤務者2名を含む）41名、小学校教員31名、中学校教員4名、行政関

係者4名、大学院教員2名、大学院生5名、その他2名であった。

研修の概要はTable1の通りであり、令和3年4月28日（水）13時25分～16時45分の日程で実施された。プログラムの前半は保育について、後半はスタートカリキュラムについてであった。前後半ともに事前視聴した動画についての協議を中心としたグループトークとその内容を参加者全員で共有する全体交流が含まれていた。なおグループトークでは、園とそれ以外の校種・施設勤務の参加者が含まれるよう、4～8名からなるグループが10組編成された。後半では、当校園での接続の取組を説明する全体発表、スタートカリキュラムの動画についての説明、行政における幼小接続担当者、大学教員も交えたトークセッションが行われた。

Table1 オンライン研修プログラムの概要

ねらい		
(1) これまでの実践から見出した当校園の幼小接続の在り方について提案することにより、新潟県・長岡市の幼小接続の発展に寄与する。 (2) 幼小接続について参会者から意見をもらったり、参会者と意見交流をすることにより新しい知見を見出し、今後の当校園の幼小接続を深化させていく。		
時間	プログラム名(場所)	内容
5分	開会式 (メインルーム)	挨拶および企画趣旨説明(附属幼稚園園長)
保育に関する研修		
40分	保育に関する グループトーク (ブレイクアウトルーム)	参加者の希望をもとに3歳児グループ1組(8名)、4歳児グループ1組(7名)、5歳児グループ8組(27名を4～5名に分割)に分割し、ブレイクアウトルームに振り分けて以下を実施。①自己紹介②保育動画の事前視聴*をふまえ「この時期の保育で大切にしたいこと」というテーマで協議③幼小接続についての情報交換。園とそれ以外の校種あるいは教育施設勤務の参加者が含まれるようグループ編成した。1グループにつき、附属校園の教員1,2名が司会、参加者のうち1名が記録を務めた。
10分	全体交流 (メインルーム)	グループトークを行った2グループの記録者が話題になったことを3分程度で発表した。残りのグループはZoom上のチャットボックスに内容を書き込み参加者全員で共有できるようにした。
15分	休憩	
スタートカリキュラムに関する研修		
20分	全体会 (メインルーム)	①挨拶(附属小学校校長) ②当校園の幼小接続の取り組みの概要:幼小接続部会の取り組み、幼小接続全体計画、1年生授業検討・協議の過程、スタートカリキュラム検討過程等を小学校研究主任が説明 ③スタートカリキュラムについての説明:1年生担任教諭2名が事前視聴動画**で示した国語、算数、朝活動について説明。
45分	スタート期についての グループトーク (ブレイクアウトルーム)	参加者を5,6名からなるグループ15組に分割し、ブレイクアウトルームに分けて以下を実施。①自己紹介②スタートカリキュラムの事前視聴**をふまえ、幼小接続授業について協議。協議題は「安心して学校生活を送り、伸び伸びと自己表現し、主体的に学びに向かっていく子ども」の姿が見られたか。③幼小接続についての情報交換。園とそれ以外の校種、教育施設勤務の参加者が含まれるようグループ編成した。1グループにつき、附属小学校教員1名が司会、参加者のうち1名が記録を務めた。
10分	全体交流 (メインルーム)	グループトークを行った2グループの記録者が話題になったことを3分程度で発表した。残りのグループはZoom上のチャットボックスに内容を書き込み参加者全員で共有できるようにした。
50分	トークセッション (メインルーム)	スタートカリキュラムおよび幼小接続についての①長岡市の取組発表(長岡市教育委員会)②長岡市と附属校園の発表に対する指定討論(大学教員)③指定討論に対する各発表者からの返答④フロアからの声
5分	閉会式 (メインルーム)	挨拶(附属幼稚園園長)

*保育に関する動画は3歳(4月)、4歳(4月)、5歳(4月)、5歳(後期)から選択視聴(付録1参照)

**スタートに関する動画は朝活動、国語(付録2参照)、算数(付録3参照)が用意された。

2. 特徴

これまでに検討対象とされてきた研修（伊藤ら, 2020;片岡, 2015;木村, 2021;小松, 2020;清水, 2014）と比較すると、本研修の主要な特徴は次の4点と考えられる。第1に、保育と小学校授業、両者についての研修内容から構成されること、第2に、研修が動画視聴やグループトーク（協議会）を中心に構成されること、第3に、多様な校種や教育施設（保幼小中、行政関係者）所属の参加者からなるグループ編成を行い、グループトークを実施したこと、第4に、コロナ禍における工夫として、オンラインでなされた研修会であったことである。なお事前視聴を求めた動画に撮影されていた保育、授業に関する資料を付録1（保育）、付録2, 3（小学校スタート期）として付した。

調査方法

1. 調査協力者

研修会に参加した89名のうち、アンケートに回答したのは保育者16名（保育所勤務10名、幼稚園勤務1名、こども園勤務5名）、小学校教員18名、中学校教員4名、教職大学院ストレートマスター院生5名、教育行政関係者1名、計44名であり、回収率は49.3%であった。なお、保育者が勤務する園の設置主体については、公立、私立ともに含まれていたが、アンケート項目に関連する問いが含まなかったため、比率は不明である。本研究の目的と本研修の特徴を踏まえ、保育者と小学校教員の中から、研修会の中心となる全体参加に加え、保育と小学校に関する研修要素の両方について参加した者のみを分析対象とした^{註2}。小学校教員13名、保育者11名であった。なお、結果的に小学校教員のうち9名は新潟大学教育実践学研究所M1の現職院生であり、必修授業「発達理解の理論と実践」の一環として参加した者であった。これらの院生は、研修会終了後に、幼児教育の基本を知るレクチャ（講師附属幼稚園教諭）をオンラインライブ配信により1時間程度受講し、その後にアンケートに回答した。

2. 調査日

研修会終了後の令和3年4月28日～4月30日

3. 調査手続き

研修会終了後、web上のアンケートサイトへのアクセス方法を参加者に教え、本研修に対する意見、感想等を問う調査項目への回答協力を求めた。当初このアンケートは研究目的で利用することを考えておらず、「今後も連携や接続に関する、よりよい研修会を計画していく」ために調査を実施することを説明した。アンケート表紙には、匿名の調査であること、厳重な情報管理をすること、回答が不利益につながることはないこと、回答は個人が特定できない形で分析を行うことなどの説明を掲載し、その後の調査項目へは、これらに同意を示した者のみが進み、回答できるように設計されていた。調査は令和3年4月28日の研修会終了後になされ、締切は4月30日であった。

4. 質問項目

Table 2 に回答を求めた質問項目を示した。

Table2 アンケート項目

1) フェイスシート項目：対象者の属性について次の質問をした。①現在の勤務校②教職大学院への所属の有無と現職かストレートマスターかを尋ねた。
2) 研修会の各要素への参加状況と学びについて：研修会の各要素への参加の有無を尋ね、さらにそこでの学びの程度について4段階での評定（(学びが) 全くなかった～とてもあった）を求めた。
3) 幼児期の子どもの学びや育ちの様子、指導の在り方についての理解の深まりについて：①「幼児期の子どもの学びや育ちの様子や、指導の在り方についての理解は以前より深まりましたか（全く深まらなかった～とても深まったまでの4段階評定）」②「①について深まった理由、深まらなかった理由をお聞かせください（自由記述）。」
4) 小学校入学直後の子どもの学びや育ちの様子や、指導の在り方についての理解の深まりについて：①「小学校入学直後の子どもの学びや育ちの様子や、指導の在り方についての理解は以前より深まりましたか（全く深まらなかった～とても深まったまでの4段階評定）」②「①について深まった理由、深まらなかった理由をお聞かせください（自由記述）。」
5) 自校・自園の取り組みに参考にできそうな点について：①「自校・自園の取り組みに参考にできそうな点がありましたか？(ある・ないの2択)」②「どのような点が参考にできそうですか。お聞かせください。（自由記述）。」
6) 研修会に参加して学んだこと、および、感じたことについて：「今回の研修会に参加されて、あなた自身が学ばれたことや、感じられたことについて、できるだけ詳しく、率直なご意見をお聞かせください。できれば研修会のどの部分でそれを学び、感じたかも合わせて教えて下さい（自由記述）。」

5. 分析方法

質問項目のうち、数値的に処理可能なものは単純集計を行い、自由記述についての分析は次のように行った。まず筆頭著者が記述内容を読み、回答内容の分類カテゴリを複数作成し、全対象者の回答を対応すると思われるカテゴリに分類した。次に、筆頭著者と本研修会の運営メンバーである小学校教諭2名（本論文第2、第4著者）と幼稚園教諭1名（本論文第3著者）が打合せ会を開催し、全記述の分類結果を一つ一つ確認し、筆頭著者が作成したカテゴリおよび各記述のカテゴリ分類の妥当性について協議した。協議においてはカテゴリ分類の妥当性について8点の疑義が提出され、これらについては話し合いにより対応カテゴリを最終決定した。なお、一人の対象者の回答には複数内容が含まれている場合が多く、その場合は該当するすべての分類カテゴリに1カウントずつを加えた。

6. 倫理的配慮

平成26年度文部科学省と厚生労働省による「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」および公益財団法人「日本心理学会倫理規程」に基づき研究計画書を作成し、新潟大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号2021-0071)を得て実施した。

調査結果

1. 研修会の各要素への参加状況と学びについての分析結果

Table3は、調査対象者のうち、研修会の各要素へ参加した人数を示したものである。各研修会要素において参加者がどの程度学んだと感じたかについては、トークセッションでは学びが「あまりなかった」との回答が1名みられたものの、その他のすべての研修要素においては、学びが「まあまああった」「とてもあった」のどちらかの回答が示された。動画視聴やグループトークにおいて学びが多いと感じる参加者が比較的多い傾向が示された。

Table3 研修会への参加状況

	保育者(N=11)	小学校教諭(N=13)
保育動画の事前視聴	10	12
保育に関するグループトーク	11	11
全体会	11	13
スタカリ動画の事前視聴	11	12
スタート期に関するグループトーク	9	12
トークセッション	11	13

2. 「小学校入学直後の子どもの学びや育ちの様子や、指導の在り方」についての理解の深まり

「小学校入学直後の子どもの学びや育ちの様子や、指導の在り方についての理解は以前より深まりましたか」という質問に対し、全員が「とても深まった（小学校教員76.9%名、保育者72.7%）」あるいは「まあまあ深まった（小学校教員23.1%名、保育者27.3%）」を選択した。

「理解が深まった理由」について、回答はTable4に示した9カテゴリのいずれかに分類でき（複数のカテゴリに分類されるものもあった）、それらを4つにグルーピング可能であった。具体的事例は本文中（ ）内及び、Table4中に示した。4グループのうち【スタート期の子どもの姿や指導・取り組み】が比較的多く、「1 子どもの有能性や能動性（小学校入学が0からのスタートではないこと。子どもたちの主体的でありかつ、自主的な動き・発想が学べた）」2 幼児期からの経験・学びの蓄積や連続性を反映する子どもの姿やそれらを踏まえた指導（幼稚園が、知識技能ではなく学ぶ意欲を大切に育てていることが分かり、小学校ではどのようにつなげていけばいいのの具体的なイメージができたからです。）」3 子ども中心の指導・遊びや環境を通じた教育（子どもが自主的に学ぼうとしている様子や、それに対して先生が『どうしてそう思ったの?』と興味を示して質問したり、『いい考えだね』と肯定的に受け入れたりしている様子を見て、子どもが安心して学べる場ができていたと思った。）」についての気づきがみられた。【接続期後の子どもの姿や指導・取り組み】については、「5 接続期後の子どもの姿や取り組みへの関心（スタートカリキュラムの時期だけでなく、今後それをどのようにグラデーションしながら授業を行っていくのかも今後見ていきたいなと思いました。）」や、「6 自校での実践との関連（附属長岡小学校でのスタートカリキュラムの取組は多少知ることができた。しかし、この取組を自校でどのように実際に行っていくのかは、考えていく必要がある。）」についての気づきがみられた。さらに【研修の在り方】としては、本研修の要素である「7 動画視聴（実際に動画で観ることでより理解が深まった）」8 グループトーク（小学校の先生方の実践を基に話し合うことができたから）」について、主としてその良さへの言及がみられた。

以上から、本研修は、小学校入学直後の子どもの姿や指導・取り組みについて、幼児期からの経験や学びの連続性のもとに子どもの有能性や能動性をとらえ、子ども中心の指導・遊びや環境を通じた教育の重要性に気づくことに貢献した可能性が考えられる。さらにそれらの気づきを接続期後の子どもの姿や自校での取り組みと関連させて考える機会となっていたことも示唆される。

3. 幼児期の子どもの学びや育ちの様子、指導の在り方についての理解の深まり

「幼児期の子どもの学びや育ちの様子や、指導の在り方についての理解は以前より深まりましたか」という質問に対して全員が「とても深まった（小学校教員76.9%名、保育者72.7%）」あるいは「まあまあ深まった（小学校教員23.1%名、保育者27.3%）」を選択した。

「理解が深まった理由」については、対象者の回答はTable5に示した7カテゴリのいずれかに分類でき（複数のカテゴリに分類されるものもあった）、それらを2つにグルーピング可能であった。具体的事例は本文中（ ）内及び、Table5中に示した。【幼児期の子どもの姿や指導・取り組み】についての気づきが比較的多く、「1 幼児期の子どもの姿（低学年の担任経験がなく、また保育の様子を今まで見たことがなかったので、こういった子どもたちが小学校へ上がってくるのかと、単純に勉強になりました。）」2 幼児期からの経験・学びの蓄積や連続性（進級、就学で何かが変わるのでなく、育ちは継続している。改めて実感する機会となった。）」3 子ども中心の指導・遊びや環境を通じた教育（小学校の先生や附属幼稚園の先生の子どもへの関わり、声かけが丁寧で、子どもが自発的に取り組みたくなるような関わりで参考になった。）」4 自園での実践（今私たちがやっていることは、間違いではなく、さらに10の姿を意識して保育に取り組みたいと思いました）」についての気づきがみられた。さらに【研修の在り方】としては、本研修の要素である「7 動画視聴（「遊び」を通して様々な力をつけていることが動画を見ながら理解できました。）」8 グループトーク（幼～中まで様々な校種の方からお話を聞いたのが大きかったです。）」について、主としてその良さへの言及がみられた。

以上から、本研修は、幼児期の子どもの姿や指導の在り方について、幼児期の子どもの姿への新たな気づきに加え、幼児期からの経験や学びの連続性、子ども中心の指導や遊び・環境を通じた教育の重要性に気づくことに貢献した可能性が考えられる。さらにこれらの気づきを自園での取り組みと関連させて考える機会

となっていたことも示唆される。

4. 自校・自園の取り組みに参考にできそうな点

「自校・自園の取り組みに参考にできそうな点がありましたか」という質問に対して全員が「ある」と回答した。「自校・園での取り組みに取り入れたい点」については、対象者の回答はTable6に示した9カテゴリのいずれかに分類でき（複数のカテゴリに分類されるものもあった）、それらを2つにグルーピング可能であった。具体的事例は本文中（ ）内及び、Table6中に示した。【連携の在り方】については、「1 目指す姿・価値観・ねがいのすり合わせ、共通認識（幼小の職員で、育成を目指したい子ども像を共通理解することです。）」「2 子どもや取り組みを見合う（職員や子どもの交流）」「3 他校園種との連携・協力（近くの小学校と連携を取り合いたいと思う）」「4 自校園での研修や理解促進（スタートカリキュラムの全校職員の理解）」がみられた。【指導・取り組み】については「5 幼児期からの経験・学びの蓄積や連続性を踏まえた指導・取り組み（この時期大切にすべきこと。小学校接続の時期であれば、一年生を何もできない人ではなく、幼保の育ちの土台があることをふまえてのカリキュラム作成。）」「6 子ども中心の指導・遊び・環境を通じた教育（周りの協力を得ながら、のびのびと活動できる環境を作りたいと思います。）」「7 スタート期における指導・取り組み（スタートカリキュラムを取り入れた1年生の授業開き）」「8 保護者・家庭（各園、いろいろな特色がある中で、保育が充実・満足・安心する園生活を運営していくと共に、保護者支援も同等なくらい大切に丁寧にしていきたい。）」がみられた。

以上から、本研修は、自校・自園の取り組みに参考にできそうな点として、連携の在り方や、具体的な指導や取り組み方法について多岐にわたる知見を提供できた可能性がある。中でも「6 子ども中心の指導・遊び・環境を通じた教育」に関する気づきが多かった。

5. 研修会に参加して学んだこと、および、感じたこと

「研修会に参加して学んだこと、および、感じたこと」については、対象者の回答はTable7で示した13カテゴリのいずれかに分類でき（複数のカテゴリに分類されるものもあった）、それらを4つにグルーピング可能であった。以下の本文中では、上記2～4ですすでに示したカテゴリと重複がないものについて述べる。具体的事例は本文中（ ）内及び、Table7中に示した。【連携の在り方】については、「1 相互理解・他校園種理解（幼稚園、小学校のつながりが大切。互いを、理解し、取り入れようという姿勢が必要。）」「3 話し合い・情報交換・情報共有（場面を共有し、事例検討のような形でしっかり話しあう事で、お互いの目指す姿が一致する事が出来るのではないかと感じた。）」「6 行政・自治体を含む諸機関の連携・協力（幼稚園と小学校の連携ではなく、それを自治体がフォローしていくといった構図が非常に勉強になりました。なぜかという、小学校は複数の幼稚園保育園から子どもを迎え入れますし、幼稚園保育園も複数の小学校へ子どもを入学させるからです。その際に指針（モデル？子ども像？）となるようなものがないと、どこに目指す子ども像をもっていっていいかわからなくなるからです。）」への言及がみられた。【スタート期の指導・取り組み】については、「7 園での子どもの経験、保育上の取り組み、環境とのつながりへの配慮（今回、幼小の様子を動画で見せていただいたことで、幼稚園は、これが学びにつながっている、小学校はそれを受けて、学びにつなげる、という擦り合わせが出来ていることがすごいと思った）」への言及がみられた。【幼児期の指導・取り組み】では、「11 保育者の考え（複数回にわたるグループセッションで、普段話を伺うことのない保育園の先生方から思いや考えを聞くことができて大変良かった。）」「12 就学後の状況や取り組みと保育・アプローチ期との関連（接続期において小学校がかなり歩み寄ってきてくれる事に驚いた。ではアプローチカリキュラムとしては幼保側は何を意識したらいいのか、というところが具体的に聞きたい。資料ややっている事を見ると大体どこの保育園や幼稚園も取り組んでいることであり、小学校へ向けての取り組みは、幼保としては当たり前な事がすでにアプローチカリキュラムというのではないかと考えている。それをアプローチカリキュラムとして打ち出す意味はどのようなことが目的か。小学校との共通理解の為に必要なのか）」がみられた。

特に「相互理解・他校園種理解」「話し合い・情報交換・情報共有」「園での子どもの経験、保育上の取り組み、環境とのつながりへの配慮」についての言及が多かった。

考察

以上を踏まえると、本研修では、幼児期、小学校入学直後のどちらについても、「子どもの育ちの連続性やそれを踏まえた指導・取り組み」「子ども中心の指導や遊び・環境を通じた教育」についての学びが比較的多い傾向が示された。また「相互理解・他校園種理解」「話し合い・情報交換・情報共有」といった連携のあり方に関する学びも比較的多い傾向が示された。以下では、文部科学省初等中等教育局教育課程課・幼児教育課（2019）が「幼小接続を進めるため」に幼児期の教育と小学校教育に携わる者に対して求めている3点について、本研修が、どのような点で寄与しうるかについて考察を行う。

1. 教育の特性を相互に理解すること

幼児期の教育と小学校教育には、教育課程の構成原理や指導方法等で様々な違いがみられる。具体的には、教育目標に関する位置づけ（幼児期の教育では方向目標、小学校教育は到達目標を重視）、内容、時間の設定や指導方法等（幼児期の教育は環境を通して行うことを基本とし、幼児期の生活や経験からの学び、自発的な活動を重視している。一方で、小学校教育においては、各教科等から構成される時間割に基づく学級単位の集団指導が原則となる。）が挙げられる。

本研修においては、双方の具体的相違としてこれらが指摘されることはなかったが、特に幼児期の教育の特性についての理解が対象者の校園種を問わず進んだ可能性がある。「子ども中心の指導・遊び・環境を通じた教育(Table4(3), 5(3), 6(6), 7(8))」への言及が、保育者、小学校教員双方でみられたことが裏付けとなろう。さらに、「相互理解・他校園種理解(Table7(1))」への言及についても、保育者、小学校教員双方でみられたことから、相互理解の必要性についての気づきを促した可能性が考えられる。

Table4 小学校入学直後の子どもの学びや育ちの様子、指導の在り方についての理解が深まった理由（例における数字は同時に振り分けられたカテゴリ番号を示す）

グループ	カテゴリ	保育者 (N=11)	小学校 教員 (N=13)	総計 (N=24)	例
スタート期の子どもの姿や指導・取	1 子どもの有能性や能動性	3	0	3	小学校入学が0からのスタートではないこと。子どもたちの主体的でありかつ、自主的な動き・発想が学べた。
	2 幼児期からの経験・学びの蓄積や連続性を反映する子どもの姿やそれらを踏まえた指導・取り組み	2	3	5	・遊びの大切さ(3)。小学校でもつなげていきたい。 ・幼稚園が、知識技能ではなく学ぶ意欲を大切に育てていることが分かり(3)、小学校ではどのようにつなげていけばいいかの具体的なイメージができたからです。
	3 子ども中心の指導（意欲・主体性・興味関心の重視・個に応じた指導）・遊びや環境を通じた教育	3	2	5	・子どもが自主的に学ぼうとしている様子や(1)、それに対して先生が『どうしてそう思ったの?』と興味を示して質問したり、『いい考えだね』と肯定的に受け入れたりしている様子を見て、子どもが安心して学べる場ができていたと思った。 ・発表にあったスタートカリキュラムは素晴らしい。意図的に自然に選択させる環境を設定していることが素晴らしい。
	4 その他	3	1	4	省略
の接続や期組指導の子ども取	5 接続期後の子どもの姿や取り組みへの関心	1	0	1	スタートカリキュラムの時期だけでなく、今後それをどのようにグラデーションしながら授業を行っていくのかも今後見ていきたいなと思いました。(アクティブラーニングのような形をとっていくのだと思いますが、それをどのような感じで行うのかなど。)
	6 自校園での実践との関連	0	3	3	附属長岡小学校でのスタートカリキュラムの取組は多少知ることができた。しかし、この取組を自校でどのように実際に行っていくのかは、考えていく必要がある。
りの研 方 在 修 その他	7 動画視聴	2	1	3	実際に動画で観ることでより理解が深まった
	8 グループトーク	0	2	2	小学校の先生方の実践を基に話し合うことができたから
	9 その他	0	1	1	省略

Table 5 幼児期の子どもの学びや育ちの様子、指導の在り方についての理解が深まった理由（例における数字は同時に振り分けられたカテゴリ番号を示す）

グループ	カテゴリ	保育者 (N=11)	小学校 教員 (N=13)	総計 (N=24)	例
幼児期の 子どもの 姿や 指導 ・ 取り 組み	1 幼児期の子どもの姿	2	4	6	・低学年の担任経験がなく、また保育の様子を今まで見たことがなかったので、こういった子どもたちが小学校へ上がってくるのかと、単純に勉強になりました。 ・保育動画から様々な姿を出してもらうことにより、子どもの姿や学びの様子の理解が深まった。(6)
	2 幼児期からの経験・学びの蓄積や連続性	2	0	2	・幼児期の体験や経験の積み重ねが、小学校などに繋がっていくことを確認できたから。 ・進級、就学で何かが変わるのでなく、育ちは継続している。改めて実感する機会となった。
	3 子ども中心の指導（意欲・主体性・興味関心の重視）・遊びや環境を通した教育	2	0	2	・小学校の先生や附属幼稚園の先生の子どもへの関わり、声かけが丁寧で、子どもが自発的に取り組みたくなるような関わりで参考になった。 ・環境設定と教師の援助 遊びの中で育てる なんとなく分かっているつもりでいたが、実際の話聞いて深まった。(7)
	4 自校園の実践	2	0	2	・今私たちがやっていることは、間違いではなく、さらに10の姿を意識して保育に取り組みたいと思いました。
	5 その他	3	1	4	省略
研修 方 の 在 り	6 動画視聴	3	3	0	「遊び」を通して様々な力をつけていることが動画を見ながら理解できました。(3)
	7 グループトーク	1	6	7	・幼～中まで様々な校種の方からお話を聞いたのが大きかったです。 ・動画を見ての話し合いで学びがより深まった。(6)
	無回答	1	4	5	---

Table 6 自校・自園の取り組みに参考にできそうな点（例における数字は同時に振り分けられたカテゴリ番号を示す）

グループ	カテゴリ	保育者 (N=11)	小学校 教員 (N=13)	総計 (N=24)	例
連携 の 在 り 方	1 目指す姿・価値観・ねがいのすり合わせ、共通認識	0	2	2	幼小の職員で、育成を目指したい子ども像を共通理解することです。
	2 子どもや取り組みを見合う（授業、保育参観、交流）	0	2	2	・保育体験 ・職員や子どもの交流
	3 他校園種との連携・協力	2	1	3	近くの小学校と連携を取り合いたいと思う。
	4 自校園での研修や理解促進	0	1	1	スタートカリキュラムの全校職員の理解
指導 ・ 取 り 組 み	5 幼児期からの経験・学びの蓄積や連続性を踏まえた指導・取り組み	3	0	3	この時期大切にすべきこと。小学校接続の時期であれば、一年生を何もできない人ではなく、幼保の育ちの土台があることをふまえてのカリキュラム作成。
	6 子ども中心の指導（子どもの意欲・主体性・興味関心の重視）・遊び・環境を通した教育	6	5	11	・子供が、心を動かしながら学んでいくカリキュラム ・周りの協力を得ながら、のびのびと活動できる環境を作りたいと思います。 ・子どもを共感的に受け入れる。
	7 スタート期における指導・取り組み	1	4	5	・スタートカリキュラムを取り入れた1年生の授業開き
	8 保護者・家庭	1	0	1	各園、いろいろな特色がある中で、保育が充実・満足・安心する園生活を運営していくと共に、保護者支援も同等なくらい大切に丁寧にしていきたい。
	9 その他	2	0	2	省略
	無回答	1	2	3	--

Table7 研修会についての感想(例における数字は同時に振り分けられたカテゴリ番号を示す)

グループ	カテゴリ	保育者 (N=11)	小学校 教員 (N=13)	総計 (N=24)	例
連携の 在り方	1 相互理解・他校園種理解	2	5	7	・幼稚園、小学校のつながりが大切。互いを、理解し、取り入れようという姿勢が必要。 ・小学校実践のビデオを拝見させていただき、小学校側が幼児教育を理解しようとし、かつ自分たちの学びとつなげて試行錯誤する姿が大変印象深かった。(7)
	2 目指す姿・価値観・ねがいのすり合わせ・共通認識	1	4	5	・今回の研修で、連携をするのであれば目指す姿を共有することは必須で、そこからどれだけそれぞれの成長段階の子どものための具体的な姿を明確化できるかと思った。 ・保育園・幼稚園と小学校とで共通認識を持つことがとても大切である一方、その難しさも感じました。
	3 話し合い・情報交換・情報共有	3	2	5	・場面を共有し、事例検討のような形でしっかり話しあう事で、お互いの目指す姿が一致する事が出来るのではないかと感じた。 ・保育者と教員が本日のようなトークをすることで、園や学校での取り組みについて理解・学びに繋がっている。(1)
	4 子どもや取り組みを見合う(授業参観・保育参観)	2	0	2	・トークセッションで出た、目指す姿の一致、というのは言葉だけでは難しいとは思ったので、実際の現場を見合つたうえで、「これが気付きだ」「この気付きは〇〇につながってる」というのがうまく小学校へ伝えることが出来るかと思う。(2)(3) ・以前から、保育現場を数時間ではなく、一週間ほど継続して小学校の先生にみてもらいたい、そして保育者も同じように小学生という立場で授業に参加させてもらいたいと思っていた。
	5 他校園種との連携・協力	1	1	2	・五泉市では市としてアプローチカリキュラムやスタートカリキュラムへの着手はなく、保育園の年長部会としてアプローチカリキュラムに取り組もうかという話が出ていたが、小学校側の理解も求めつつ協力して作成する事が必要だと今回の研修に参加して感じた。 ・幼小連携をしましょうと言われていたが、実際難しいことがたくさんあると感じた
	6 行政・自治体を含む諸機関の連携・協力	0	1	1	幼稚園と小学校の連携ではなく、それを自治体がフォローしていくといった構図が非常に勉強になりました。なぜかという点、小学校は複数の幼稚園保育園から子どもを迎え入れますし、幼稚園保育園も複数の小学校へ子どもを入学させるからです。その際に指針(モデル?子ども像?)となるようなものがないと、どこに目指す子ども像をもっていったらいいかわからなくなるからです。
スタート 期の 指導・ 取り 組み	7 園での子どもの経験、保育上の取り組み、環境とのつながりへの配慮	5	2	7	・今回、幼小の様子を動画で見せていただいたことで、幼稚園は、これが学びにつながっている、小学校はそれを受けて、学びにつなげる、という擦り合わせが出来ていることがすごいと思った(2) ・幼稚園の4月も小学校への接続も前の学年の遊びや育ちを生かして、子どもたちがいきいきと取り組めるように教員が意識することが共通するのではないかと考えた。
	8 子ども中心の指導(子どもの意欲・主体性・興味関心の重視)・遊び・環境を通した教育	0	2	2	・グループトーク①で、「いま大切にしたいこと」は、学校が好きという気持ちや主体性、知的好奇心だということがとても印象的でした。集団行動、規律の面も0にはできない現実ではありますが、意識がかなり変わりました。 ・今までの「算数科」ですと、黒板で数字の学習があり絵の中から「4」を探そうと受動的な学習が多かったと思います。今回は、探していく。それをロイロで発信、集約する。「4を知りたい」→「探したい」→「知らせたい」→「他の人も知りたい」と多くの「たい」が見られました。これは「園」で育まれている姿であり、小学校で大切にしていかなければいけない姿だと感じました。
	9 その他	3	1	4	省略
幼児期 の 指導・ 取り 組み	10 子ども中心の指導(子どもの意欲・主体性・興味関心の重視)・遊び・環境を通した教育	1	1	2	・動画での子どもの姿やグループセッションでの保育園の先生の話の聞き、保育園や幼稚園で子どもたちは自分の興味・関心を大切にしながら、人とかわり、その過程でたくさんを学んでいることが分かった。
	11 保育者の考え	0	1	1	複数回におわたるグループセッションで、普段話を伺うことのない保育園の先生方から思いや考えを聞くことができて大変良かった。
	12 就学後(スタート期も含め)の状況や取り組みと保育・アプローチ期との関連	1	0	1	接続期において小学校がかなり歩み寄ってきている事に驚いた。ではアプローチカリキュラムとしては幼保側は何を意識したらいいのか、というところが具体的に聞きたい。資料ややっている事を見ると大体どの保育園や幼稚園も取り組んでいることであり、小学校へ向けての取り組みは、幼保としては当たり前な事がすでにアプローチカリキュラムというのではないかと思っている。それをアプローチカリキュラムとして打ち出す意味はどのようなことが目的か、小学校との共通理解の為に必要なのか。
研 修 方 の 在	13 研修の在り方	3	1	4	・グループトークで様々な業種の人と同じ動画からの意見交換することができてよかった。 ・附属小学校園が率先して保幼小の先生方が一堂に会する研修を実施すること自体、とても意味があると思う。 ・動画で小学校の取り組みを観ることができたこともよかった。

2. 連携、接続の体制をつくる

幼児期と児童期、双方の教育活動のつながりを見通しつつ、学習を展開するために連携、接続の体制づくりが重要であること、体制づくりは、教職員の交流などの人的な連携から始まり、次第に両者が抱える教育上の課題を共有し、やがて幼児期から児童期への教育のつながりを確保する教育課程の編成・実施へと発展する、とされる。

本研修は、他校園種の教職員との連携・協力や教育課題の共有の大切さの認識を促した可能性がある。「目指す姿・価値観・ねがいのすり合わせ、共通認識 (Table6(1), 7(2))」「子どもや取り組みを見合う (Table6(2), 7(4))」「他校園種との連携・協力 (Table6(3), 7(5))」「話し合い・情報交換・情報共有 (Table7(3))」「行政・自治体を含む諸機関の連携・協力 (Table7(6))」への言及が保育者、小学校教師の双方にみられたことが裏づけとなろう。

3. 教職員が意識的に幼小接続に取り組む

幼児期の教育に携わる者及び小学校教育に携わる者の双方に次の4点を意識することが求められるとされる。①幼児期と児童期の教育課程・指導方法等の違い、子どもの発達や学びの現状等を正しく理解する、②(幼児期の教育に携わる者は)児童期の教育を見通して教育を実施する、③(小学校教育に携わる者は)幼児期の教育を踏まえて教育を実施する、④他の教職員や保護者と連携・接続のために必要な関係を構築すること、である。

本研修では、①から④の意識が促された可能性がある。①については、既上記1において、特に幼児期の教育の特性についての理解が対象者の校園種を問わず進んだ可能性を指摘した。②については、「幼児期からの経験・学びの蓄積や連続性(Table5(2))」「幼児期からの経験・学びの蓄積や連続性を踏まえた指導・取り組み(Table6(5))」「就学後の状況や取り組みと保育・アプローチ期との関連について(Table7(12))」への言及が保育者からみられたことが裏づけとなろう。③については「幼児期からの経験・学びの蓄積や連続性を反映する子どもの姿やそれらを踏まえた指導(Table4(2))」「園での子どもの経験、保育場の取り組み、環境とのつながりへの配慮 (Table7(7))」への言及が保育者・小学校教員双方からみられたことが裏づけとなろう。④については、「保護者・家庭 (Table6(8))」への言及が保育者1名から見られたことが裏づけとなろう。これに関連する言及は見当たらなかった。

4. まとめ

以上を踏まえると、本研修は「幼小接続を進めるため」に必要とされる諸要素について、寄与しうる内容であったと推測される。

本研修では、保育と小学校授業、両者についての研修内容から構成されること、研修が動画視聴やグループトークを中心に構成されること、異なる校園種や教育施設所属の参加者からなるグループ編成を行い、グループトークを実施したことが特徴であった。多くの参加者が学びの深まりの理由として「グループトーク」および「事前動画視聴」を挙げていたことから、保育、小学校授業の両方についての研修内容として具体的な子どもの姿を踏まえた協議があることが学びに寄与していた可能性が推測される。

もちろんどのような動画内容であったか、どのようなグループトークであったか、どのような全体発表がなされていたかなど、これらの内容が参加者の学びを大きく左右する可能性がある。研修のどのような要素がどのような学びを促すかについては、今後組織的に検討する必要がある。又、自由参加の研修会であったことも結果に影響した可能性もある。

オンラインでなされた研修会において、連携、接続を進めるために必要な学びが促進される可能性が示唆されたことも意義深い。オンライン研修は対面とは異なるメリットがあり、時間的・空間的制約を超え、地域の垣根、園・学校種別の垣根を超えた繋がりを促す効果があること、撮影動画の利用により視点を限定・共有した対話がしやすい事などが指摘されている(秋田・宮田・野澤, 2022)。本研修のアンケートにおいてもこの指摘と一致する感想がみられ、異なる校園種の職員間での協議や事前の動画視聴を踏まえての協議の有効性についての言及が示された。今後は、オンラインと対面の研修会のそれぞれの長所と短所を明らかにすべく、双方における参加者の学びについて詳しく比較分析する必要がある。

脚注

- 1) 国立情報学研究所 CiNiiArticles を利用し「論文検索」にて「(連携 OR 接続)& 研修& (幼小 OR 保幼小 OR 幼保小)」の検索式で検索したところ (2021年12月2日現在), 41件の論文がヒットした。その中で, 幼保小連携接続に関する研修について説明のあったのは23件であり, そのうち参加者の学びや気づきについて何らかのデータに基づいて論じているものは5件であった。これら5件は, ①特定の研修の内容とその効果の分析4件 (片岡, 2015; 木村, 2021; 小松, 2020) と, ②研修の一般的効果の検討1件 (清水, 2014) に分けることができた。
- 2) 幼稚園, 小学校, 各校園種の研修要素において, それぞれ動画視聴とグループトーク (協議会) が含まれていた。両校園種について, 動画視聴あるいはグループトークの少なくとも一方に参加した対象者を分析対象とした。

引用文献

- 秋田喜代美 (2010). 幼稚園, 保育所と小学校の円滑な接続の意義, 初等教育資料1月号 (No.856), 6-12.
- 秋田喜代美・宮田まり子・野澤祥子 (2022). ICTを使って保育を豊かに: ワクワクがつながる&広がる28の実践, 中央法規出版.
- 一前春子・秋田喜代美・天野美和子 (2021). マルチステークホルダーの視座からみる保幼小連携接続: その効果と研修のあり方, 風間書房
- 伊藤哲章・沼田春香・宗像佑華・柴田卓 (2020). 保幼小接続に関する研修・交流の実態及び保育者の意識, 郡山女子大学紀要, 56, 137-148.
- 片岡元子 (2015). 幼小連携の取り組みに関する一考察: 小学校教師の長期研修に着目して, 香川大学教育実践総合研究, 30, 65-78.
- 木村光男 (2021). 小規模自治体における幼小連携のストラテジー: A市の保幼小合同研修会を通して, 常葉大学教育学部紀要, 41, 225-236.
- 小松和佳 (2020). 子どもの発達と学びの連続性を共通理解するために: 保幼小合同研修プログラムについての一考察, 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要教育学研究, 1, 305-313.
- 厚生労働省 (2017). 保育所保育指針, フレーベル館.
- 文部科学省 (2022). 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き (初版). https://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-060/youzi/documents/kakehashi_1.pdf (2022年6月20日17時最終閲覧)
- 文部科学省 (2017a). 小学校学習指導要領, 東洋館出版.
- 文部科学省 (2017b). 幼稚園教育要領解説, フレーベル館.
- 文部科学省初等中等教育局幼児教育課 (2020). 令和元年度幼児教育実態調査 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/icsFiles/afieldfile/2020/01/30/1278591_06.pdf (2022年3月20日17時最終閲覧)
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課・幼児教育課 (2019). 幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の推進, 初等教育資料10月号 (No.985), 2-5.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017). 幼保認定こども園教育・保育要領, フレーベル館.
- 清水益治 (2014). 現職保育者の学び: 保幼小の連携に向けた研修, 第56回日本教育心理学会総会発表論文集, 405.

謝辞

調査にご協力いただいた本研修会参加者の皆様にご心より感謝いたします。またアンケート作成段階でご尽力いただいた2021年度および附属長岡校園幼小接続部会のメンバー相澤将貴氏, 小湯雄一氏, 名塚裕子氏, 平出久美子氏, 長岡市立希望が丘小学校藤田光氏および十日町市立川治小学校山川和子氏, 柏崎市立内郷小学校長谷川宏之氏にご心より感謝申し上げます。

第1回「保育のとびら」公開保育動動画

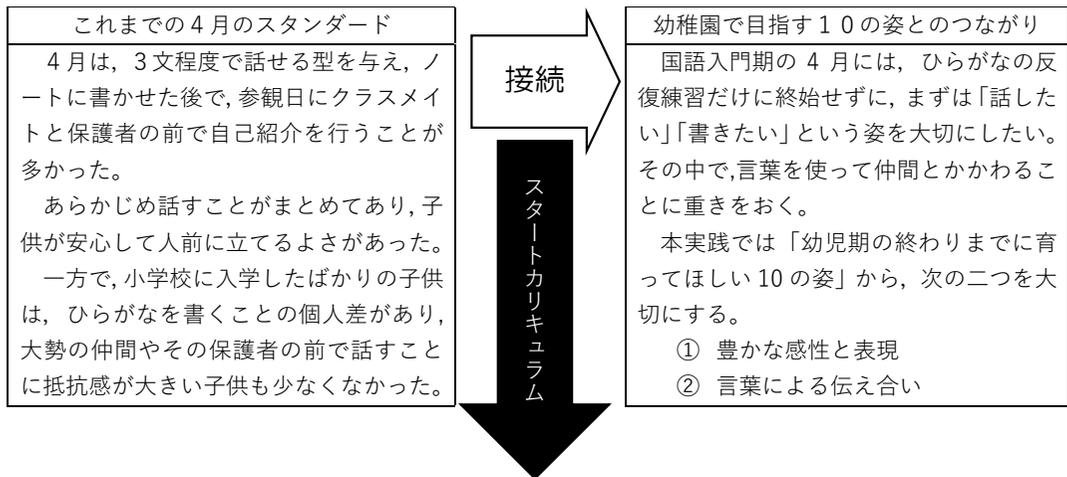
付録1

保育のねらいと前日の様相，手立て（◇環境設定□教師の援助）

	ねらい	前日の様相	手立て◇環境設定□教師の援助)
3歳児	○幼稚園の新しい環境を受け入れ、安心して遊びへ向かおうとする。	○入園後、初めての晴天での外遊びに、喜んで出ている。目に付いたシャベルを手にしたたり、「お家」に入ったり自由に「なかよし広場」を味わった。 ○「お家」では、料理作りや思ったことを話して楽しんでいた。	◇自由に使えるおもちゃを砂場の近くに用意する。 □子どもがやってみたいことを認め、時には一緒にやったり、時には一緒に喜んでいたりして同じ体験を共有するようにする。 □場を同じくした子が、何を楽しみ、どんな気持ちで遊んでいるか、見取る。
4歳児	○新しい保育室や担任、友達などと関わりながら楽しく遊ぶ。	※保育初日のため、年少の終わり頃の様相となる。 ○作りたいものを表現するために必要な素材を自分で選び、特定の素材（ガムテープ・スズランテープ）を教師から必要な分だけ受け取りながら遊んでいた。	◇年少の頃の環境構成をベースとした遊び場を用意する。また新たにビニールテープ等を用意し、ガムテープ等は子どもが自由に使えるようにした。 □必要な素材を提供したり、必要な道具を一緒に考えたりする。 □子どもの遊びのよさや面白さを称賛したり、共感したりする。
5歳児 4月	○今までの遊びの経験とつなげて、楽しく遊ぶ。 ○友達や自然のものに関わりながら、自分の遊びを広げ、楽しく遊ぶ。	○年少のころに遊んだシュレッダー粘土を使い、アイス作りを楽しんでいた。 ○お花紙をアイスの上にかぶせて楽しんでいた。 ○友達と「冷たい。」「ぬちよぬちよする。」など感じたことを言い合っていた。	◇自由な発想で遊びを工夫できるように、素材や場を設定する。 □一人一人の思いを受け止めるとともに、友達と関わっている場面では見守り、遊びの発展を支える。 □素敵な製作物ができたときの嬉しい気持ちに共感する。
5歳児 後期	1月 ○自然との関わりを通して、好奇心や探究心をもち、友達との関わりながら遊びを膨らませていく。 3月 ○友達や年下の友達との関わりを通して、自分の考えを伝えたり、相手の思いを受け入れたりしながら遊ぶ。	1月 ○自分の遊びの楽しさを友達に伝えたり、友達の遊びのよさを自分の遊びに取り入れたりして遊んでいた。 3月 ○年下の友達に意欲的に声を掛け、喜んでもらえる方法をクラスの友達と一緒に考えながら、遊びを楽しんでいた。	1月 ◇前日の遊びを継続できるように、色水を十分に使えるようにしたり、かき氷カップや霧吹きなどの素材を用意したりする。 □子どもの遊びのよさを称賛したり、他の子に紹介したりする。 3月 ◇やりたい遊びができるように、遊びの空間を確保する。 □遊びを見守り、発想のよさやがんばり、関わり方のよさを称賛する。

0428 幼小接続：スタートカリキュラム

「おもしろいもの見つけたよ-1年 見つけたものを紹介しよう-」



1 接続のため手立て

(1) 環境構成を生かした学びへの接続

保育者が工夫した様々な環境構成の中で、思いや願いを具現させてきた子供たち。そのような子供たちに、それぞれの思いや願いをもてるような環境構成を工夫する。例えば、折り紙を作ったり絵を描いたりできる材料や場所を用意したり、フィールドへ出かけ様々なものを見つれたりできるよう配慮する。子供は、もっているみずみずしい感性でモノや出来事と出会い、面白いものを見つけていく。それを仲間へ紹介したいと意欲を高める姿を大切にする。

(2) 遊びを通した学びへの接続

「こんなもの見つけたよ」、「こんなもの作ったよ」と、保育者や仲間と思いを共有しながら遊んできた子供たち。そのような子供たちに、学校探検をする中で見つけたり、自分で作ったりした「おもしろいもの」を紹介する活動を働きかける。おもしろいもの紹介を仲間とする中で、見つけたことのおもしろさや作り方について、それぞれの表現方法を用いながら言葉を紡ぐ姿を大切にする。

2 本授業で目指す姿

おもしろいもの紹介を仲間とし合う中で、言葉を用いて仲間とかかわるたのしさを感じる姿。

3 展開

学校探検（グラウンドやヤッホー広場）、ワークスペースでの工作活動などの体験の機会を多くもつ。

T1 みんなが行きたいところを教えてください。

追求問題◎「おもしろいものを見つけて、友達に紹介しよう」

T2 おもしろいものを探したり、作ったりしてきましょう。

T3 みんなが見つめてきたおもしろいものを紹介し合ひましょう



付録3

0428 幼小接続：スタートカリキュラム

算数科 「-1年生 10までの数-」



これまでの4月のスタンダード
算数入門期の4月は「算数ボックス」を用いた操作活動を通して、ものの個数、大小が数によって表せることの理解に重きを置いてきた。
一方で、4月は一斉授業における「学習のきまり」の定着を図ることも大切にしてきた。
これにより、「操作活動の時間」と「話す・聞く時間」との円滑な切り替えの可否で、子供を価値づけてきた面が少なくなかった。その結果、心を動かしながら探索・探究する姿への結びつきが弱かった。



幼稚園で目指す10の姿とのつながり
算数入門期の4月では、数字や数量を反復して覚えるのではなく、まずは数理に興味をもち「おもしろい」「なぜ?」「やってみよう」と、心を動かしながら探索・探究する姿を大切にしたい。
本実践では「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」から、次の二つを大切にしたい。
① 思考力の芽生え
② 量・図形、文字等への関心・感覚
→ ①+②=考える力(頭を使う力)

1 接続のため手立て

(1) 学びのフィールドによる接続

五感を使って自然や生き物といった環境に働きかけて遊んできた子供に、学びのフィールド(ヤッホー広場、校内、体育館)を提示する。このことにより、環境に積極的に働きかけ、発見することを楽しんだり、考えたりする中で、心を動かしながら探索・探究する姿を大切にしたい。

(2) 自由性・選択性のある活動による接続

「こんなことをしてみたい」と、自分の願いの具現に向けて身近な材料や道具を選択して遊んできた子供に、数探しの活動を組織する。このことにより、「4つ葉のクローバーがあった!」「スイッチが4つ並んでいた!」といったように、これまでの生活では意識が弱かった数への関心・意欲を高める姿を大切にしたい。

2 本授業で目指す姿

・校庭のフィールドに出かけて「4」を探す中で、数で表すことへの「たのしさ」や「よさ」を感じる姿

3 本授業の大まかな流れ

- T1 教室の外に出かけて、4を探し冒険に出かけましょう。
追求問題◎「いろんな4を見つけてこよう」
- T2 4を見つけたらタブレットで写真をとってきましょう。
- T3 ロイロノートで、探してきたものを紹介しましょう。

